

オバマと「変革」

大阪大学・UCLA 西條辰義

環境、医療、社会福祉など様々な分野で変革を唱えるオバマがブッシュの後を継ぐことになった。オバマ新大統領は、アメリカの金融制度の欠陥が引き起こした経済危機を乗り越えるため、ブッシュ政権時代に痛んでしまったインフラストラクチャの改善・整備に大胆な投資を行うであろう。

20世紀前半、大恐慌に立ち向かったルーズベルト大統領のニューディールにちなんで、将来、彼はニュー・ニューディールを遂行した大統領として記憶されるに違いない。

ところで、オバマの「チェンジ」がアメリカを変えるのだろうか。ロスアンジェルスでは、大統領選と同じ日に「法案R」の住民投票があった。ロス地域の公共交通機関を整備するため、1ドルの売り上げにかかる税を0.5セント上げるという法案である。税に関する法案の場合は、少なくとも2/3の賛成が必要となる。

ガソリン価格は少し落ち着いているが、原油の高騰で中・低所得層の公共交通機関へのシフトが起こっている。ロスでは、一年前、運賃がたった25セントのローカルなバスはがらがらだったのが、今では乗客が増えはじめている。片道1ドル25セントの電車でも、閑古鳥が鳴いていたものだが、朝夕のラッシュ時には満席で立つ乗客が出始めている。住民はエネルギーを効率的に使うことで温暖化防止に貢献することもよくわかっている。法案Rの賛成票は2/3を超える67%強であった。ロスの住民が自ら「変革」を選んだのである。

大恐慌以来といわれている経済危機の中で、昨今日本で行われている税収を現金で環流するという目的を見失った手法はアメリカでは全く人気がない。経済危機だからこそ、「グリーンな仕事」を増やす公共交通機関への投資、エネルギー使用量を減らすプロジェクトや温室効果ガスを減らす投資などで社会のインフラの整備を目指そうとしている。アメリカ社会は今まさに変わろうとしている。